

# 坂本龍馬は「株式会社と複式簿記」

を知っていたのか

久井孝則

世界初の株式会社は、1602年オランダ東インド会社である。設立当初は、東インドにおける香辛料貿易を目的とした貿易会社であった。日本との貿易は、1609年に平戸に商館を設置して始まり、鎖国の中ヨーロッパで唯一通商を認められた。

では、日本に株式会社はいつできたのだろうか。

私は、日本で最初の株式会社は坂本龍馬の「亀山社中（後の海援隊）」だと信じ込んでいた。なぜなら、学生時代に夢中になって読んだ司馬遼太郎著『竜馬がゆく』に、「亀山社中がわが国最初の株式会社である」と書かれてあったからだ。だが、それは間違いだった。最初に「亀山社中が日本最初の株式会社である」と言い出したのは、著名な経営学者である坂本藤良である。彼が、東京大学の研究室で、株式会社発生史論の研究に取り組んでいた1955年頃、わが国の初期の株式会社がその出資者を「社中」と呼んでいたことと龍馬の「亀山社中」が結びついて、日本で最初の株式会社と考えたという。しかし、後に坂本は「亀山社中は、株式会社と言えるものではなかった」と自説を覆した。司馬遼太郎は坂本藤良の学説の変更を知りながら、新聞連載『竜馬がゆく』の中で、あえて「亀山社中」をわが国最初の株式会社と書いた。誤りだと知りながら「なぜ？」

なぜなら『竜馬がゆく』が歴史書ではなく、時代小説であるという理由だった。つまり、実在した「龍馬」と『竜馬がゆく』の「竜馬」は別の人間、フィクションなので事実に対することでも「許される」と考えたからである。司馬は人物の名前をたった一文字、「龍」から「竜」に置き換えたタイトルをつけることで、堂々と「亀山社中が日本最初の株式会社である」と言い切った。司馬遼太郎は天才である。著作スタイルは、膨大な史料を収集・解説し、様々な魅力的な逸話を駆使して人物を描写する。その内容は、素人の読者にとっでは、どの部分がフィクションでどの部分が史実か、区別が付かなくなってしまう。これが司馬マジック、「司馬史観」と呼ばれるものだ。司馬の小説の数々が、イコールわが国の明治の歴史書と信じている読者は多い。司馬遼太郎というペンネームは、時代小説家を目指す本名・福田定一が、中国前漢時代の歴史家で『史記』の著者・司馬遷には遼か及ば

坂本龍馬は「株式会社と複式簿記」を知っていたのか

ないが、尊敬する目標として考え出したという。司馬遼太郎は、ペンネームのとおり、わが国の司馬遷となり明治時代研究の歴史家という地位を得た。

「亀山社中」は学術的には株式会社とはいえないものらしいが、坂本龍馬が「株式会社」を知っていた可能性は高い。「社中」とは組合の仲間という意味であり、つまりは会社、カンパニーのことである。その社中が長崎の亀山を拠点としたことから「亀山社中」と名付けられ航海業を始めた。米の輸送から武器弾薬の輸入業まで取り扱う総合商社である。「亀山社中」は龍馬によって起業されたベンチャー・ビジネスだった。幕末の混乱期に、龍馬はその人脈を活かして大藩から金を集め、脱藩浪士たちと「亀山社中」を創った。司馬の中で、それは紛れもなく、わが国初の株式会社だった。

司馬は、1989年に『明治』という国家』を発刊している。この書は小説ではなく歴史評論である。その中で、次のように述べている。

「……龍馬は勝の志を継ぎ、長崎で浪人結社亀山社中、次いで薩長土それに越前の四藩の出資より成る一種の株式会社「海援隊」をおこし、遠洋海運業を志すとともに、私立海軍の実質を高めようとしています……」

この著作は小説ではないので、「竜馬」ではなく、「龍馬」を使っている。「一種の株式会社」と、トーンは弱めになるが、それでも亀山社中（海援隊）は株式会社だと主張している。

### 龍馬と「株式会社」の接点

1843年、土佐生まれの漁師・万次郎は、鰺鮪漁の最中に遭難し、アメリカの捕鯨船に救助されて初めてアメリカに入国した日本人である。万次郎14歳の時であった。その頃のアメリカは、大きな利益が上がる事業として鉄道会社への投資が殺到した時代である。鉄道会社は巨大な資本を必要とするため、多数の投資家から資本を集めることができる「株式会社」が急速に発展し、次々と巨大企業が誕生していく「鉄道狂」時代である。

アメリカで十年間暮らした万次郎は、後に日本に帰り「ジョン万次郎」と名乗った。故郷の土佐藩で万次郎の取り調べが行われ、万次郎から聞き取ったアメリカ事情を『漂異紀略』という本にまとめたのが河田小龍である。幕末に土佐藩で絵師として名を馳せていた河田小龍が、万次郎のスケッチを元に描き上げたという『漂異紀略』の中の挿絵は、人物や、動植物はまるで本物を見て描いたかのようであったと評される。そして、『漂異紀略』の中に直接の記載はないが、カンパニーの話も小龍は聞いただろうと推測できる。

そんな小龍と龍馬の出会い、170年前の南海トラフ大地震（安政南海大地震）であった。被災した小龍が、龍馬の実家近くに避難したこと、龍馬は小龍を通して万次郎の語ったアメリカ事情を詳しく聞くことができた。小龍は龍馬に「船で海に出て世界を考

えよ」論し、龍馬は「先生は人をつくってください、自分は船を得ますから」と答えたという。あまりにも出来すぎた話で少々胡散臭いが、その後の「亀山社中（海援隊）」設立構想のヒントは小龍から得た可能性は高い。

### 「亀山社中」には何が足りないのか

法的に株式会社の要件を完全に備えたわが国最初の株式会社は、1872年に渋沢栄一を頭取として設立された「第一国立銀行」である。「亀山社中」設立から7年後のことである。「亀山社中」と渋沢の「第一国立銀行」との違いは幾つかあるが、会社運営に欠かせない会計システムが大きく異なる。

「亀山社中」でどのような会計が行われていたのかは定かではないが、1867年、「亀山社中」は龍馬が脱藩罪を許されたため土佐藩に引継がれ、場所も隊員もそのまま「海援隊」と名を改め龍馬が隊長となった。そして、会計担当をすることになったのが後の三菱財閥創設者・岩崎弥太郎だった。真偽のほどはともかく、この岩崎が龍馬の死後、維新のどさくさに紛れて海援隊の金を着服し、三菱の前身となる九十九商会を設立したという話がある。こんな話が定説となって残っているとところを見ると、当時の海援隊の会計はおそらく井勘定のようなものであったと考えられる。対して、渋沢の「第一国立銀行」は、日本で最初の株式会社であると同時に西洋式の会計システムである複式簿記を最初に採用した会社でもあった。

江戸時代の商家の会計手法は「和式帳合」と呼ばれる大福帳会計だった。これは、主に現金の出納のみを記帳する単式簿記の会計である。対して現在、世界中のほとんどの株式会社で採用されている会計は、十四世紀初頭にイタリアで発生したと言われる複式簿記の会計である。現金の出入りという側面だけを追う単式簿記に比べて、取引を資産・負債・資本の増減という二側面から取引を記帳する複式簿記の方が正確かつ明瞭性に優れているのは言うまでもない。しかし、記帳方法が優れているということだけで複式簿記が世界中に普及したわけではない。複式簿記の普及は、資本主義の発展とともにあり、言い換えれば株式会社の発展とセットだった。株式会社は大規模化と比例して出資者（株主）が増加していくのは当然のことで、多数の株主の持ち分を正確に把握するのに、複式簿記は必要不可欠の会計ツールだった。

### 龍馬が暗殺されなければ

結果として、龍馬の「亀山社中」は、株式会社の前段階の組織で、その会計システムはお粗末なままだったと思われる。この時点で、龍馬が「株式会社」のみならず「複式簿記」

坂本龍馬は「株式会社と複式簿記」を知っていたのか

のことまで知っていたのかは不明であるが、もう少し龍馬が長生きすれば、完全な日本初の「株式会社」を創っていたかもしれない。そう思わせるほど、当時活躍した幕末の志士の中で、龍馬の経済感覚は抜群に優れていた。

現在、株式会社の会計監査という役目を担っているのは、公認会計士である。株式会社が年度ごとの決算を公表するにあたって、事前に複式簿記によって作成された財務諸表が公正であることを保証する仕事である。公認会計士試験は司法試験と並ぶ難関の国家資格試験で、公認会計士は「株式会社」の会計を専門とするプロフェッショナルである。

日本公認会計士協会東京会は、坂本龍馬の言葉で会計の大切さを伝えている。

「これより天下のことを知る時は、会計もつとも大事なり」

※新しい国をつくる時、坂本龍馬は土佐藩の重臣、後藤象二郎に手紙を書きました。

「財政担当には、会計に精通している福井藩士、三岡八郎（由利公正／後、東京府知事）を採用すべし」